（別添４）

【尾張旭市】
１人１台端末の利活用に係る計画

１．１人１台端末を始めとするICT環境によって実現を目指す学びの姿

⑴　目標

一人一人が確実に自分の端末を使いこなすための活用環境を構築することで、尾張旭市のすべての児童生徒が、各教科等でＩＣＴを活用した学習に取り組めるようにし、Society5.0時代をたくましく生き抜く資質・能力を育成する。

⑵　方針

- ○　ＩＣＴを活用した学習場面において、日常的に活用されるようにする。
- ○　学習者主体の授業への転換を図る。
- ○　家庭学習との連携（オンライン学習を含む）について推進する

⑶　各教科等の指導でＩＣＴを活用することのねらい

- ○　情報活用能力を育成する
- ○　児童生徒の学習への興味・関心を高める
- ○　分かりやすい授業や「主体的・対話的で深い学び」を実現する
- ○　個に応じた指導を充実する

２．GIGA第１期の総括

- ○　令和２年度に、国のＧＩＧＡスクール構想を踏まえ、１人１台端末を整備した。このことに伴い、通信ネットワークの環境整備やICT支援員の配置等の整備も行った。市内ＩＣＴ委員会に所属する、ＩＣＴ機器の扱いに堪能な教職員を中心とした実践を進め、その実践を共有することで市内でのＩＣＴ活用を広めた。また、令和５年度からは、ＩＣＴ教育支援教員を配置し、各校への巡回を行うことで、ＩＣＴ活用のさらなる拡充とともに、教員間の格差をうめることを目指した。
- ○　臨時休校等の学びの保障として、授業支援ソフトやウェブ会議システムを活用したオンライン学習を段階的に導入した。
- ○　１人１台端末の活用推進のためには、学習系と校務系の端末をつなぐことが必須であると考えるが、そのためにはゼロトラストのシステム導入が必要となる。システム導入のための費用を確保するとともに、教員のＩＣＴに関する研修を行い、資質向上を図る必要もある。
- ○　価格高騰により、端末の値段が上昇し、修理時のコストが上がった。そのため、持ち帰り時の故障リスクを恐れて持ち帰りが進まない。

３．１人１台端末の利活用方策

⑴　ＩＣＴ活用の進め方について

- ・　ＩＣＴ活用授業の活用場面は上記のとおりである。これらの学習活動が既存の学習スタイルの中に自然な形で溶け込むことが「ＩＣＴ活用の日常化」につながり、活用イメージのゴール地点となる。
- ・　まずは、Ａ一斉学習の場面で「資料を大きく映す」ことができるようにする。

次に、Ｂ個別学習の場面で「ドリルソフト」や「教科書掲載のＱＲコード」等を活用することができるようにする。最後に、Ｃ協働学習の場面で「授業支援ソフト」を活用することができるようにすることを目指す。

⑵　活用頻度について

・　日常的な活用にあたっては、授業の中に無理なく取り入れられることが必要であり、学習における必然性がなければならない。端末を使うこと自体が目的化することは、趣旨から外れる。
・　多くの場合、授業の中で端末が利用されるのはワンポイントである。「テレビやスクリーンに映す」「ドリル学習をする」「写真や動画を撮る」「ネットで調べる」「デジタル教材を視聴する」「意見を交流する」など、短時間でも授業の目的に合った活動が効果的に行われればよい。
・　単に「授業のこま数」や「回数」という量的な観点だけでは、活用状況は測れない。授業の目的に即して、どの程度効果的な活用がなされたかという質的な観点からの評価も必要である。
・　授業の目的によっては、むしろデジタルの手法を用いない方が効果的な場合もある。特に小学校低学年の発達段階では、具体物による操作活動や紙媒体での書き取りなどを大切にする視点を踏まえると、回数や頻度は、自ずと少ない傾向となる。
・　重要なことは、教員側の指示だけでなく、児童生徒自身が学習の中での必要性に応じて主体的に端末を活用することである。そのような活用が定着していく中で、頻度が高まっていくことを目指す。